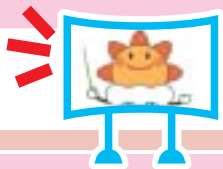




こんにちは!

気象庁です!

2月号
平成18年
(2006年)



気象科学館をご存じですか?

みなさんは、気象科学館のことをご存じですか。気象科学館は、気象庁の1階に設置されており、気象・防災の知識や気象庁ではどのような仕事をしているのかなどを理解していただけるよう、さまざまな展示がなされています。

気象科学館は、平成9年6月に開館し気象庁を訪れる方々に広く利用されています。これまでも展示物の充実が図



ミニシアターで、天気や台風、地震などの解説がご覧いただけます。また、現在使用されている気象観測測器や昔の機器なども展示されています。

られてきましたが、この度、気象科学館にミニシアターが新たに加わり、イメージのつかみにくい内容を、よりわかりやすく理解してもらえるように、映像を使った解説がご覧いただけるようになりました。現在は、地震や津波の発生する仕組みやその恐ろしさ、津波が襲ってくる場合にどのような行動をとるべきかなど防災意識を高めてもらうことを目的に制作された「津波から命を守るために!」の映像、気象庁のマスコットキャラクター「はれるん」による気象についての解説がご覧いただけます。

このほかにも、気象庁の仕事や役割、天気予報が発表されるまでの流れ、高層気象観測やレーダー気象観測、地震や火山、海洋などの観測について解説したパネルやそれらの観測をする機器などが展示されています。また、最近関心の高まってきている地球温暖化やオゾン層のことを自習できるコーナーもあります。

気象科学館の開館時間は、月曜から土曜の午前10時から午後4時（休日を除く）で、自由に見学をすることができます。土曜日は、気象予報士会の協力をいただき気象予報士の方が解説や質問にお答えしています。また、事前にお申し込みをしていただければ、気象庁職員が気象科学館の展示物とおして気象庁の仕事についての解説をいたします（月曜から金曜の午前と午後1回ずつ。人数はそれぞれ1団体のみ15名まで）。

気象庁は、天気予報だけでなく地震や火山、地球環境に関することなどいろいろな情報を発表したり、その情報の基となる観測を行っています。一度、気象科学館で気象庁の仕事について触れてみてはいかがでしょうか。



気象庁マスコットキャラクター はれるん
「気象科学館で待ってるよ!」

気象科学館についてのお問い合わせ先：

気象庁総務部総務課広報室（電話：03-3212-8341（代表）内線2117）



3月の気象

●●● 黄砂 ～大陸からの「春の使者」～ ●●●

黄砂は、主に大陸の乾燥地帯や黄土地帯の地表面の砂じん（微細な砂粒）が強風によって多量に舞い上がり、上空の西風によって、日本、中国、朝鮮半島などの広い範囲に拡散し、ゆっくりと降下する現象です。主として黄土地帯の砂じんが舞い上がることから「黄砂」と呼ばれます。大陸に近い西日本や日本海側の各地を中心に、3月から5月にかけて観測されることが多く、黄色っぽく空がかすみ、「春の訪れ」を象徴するものとして報道されることもあります。

この時期、黄砂の発生源となっている地域では、雪が消えて地面が乾燥し植物もまだ生えていません。このように砂じんが舞い上がりやすい状態であり、また、砂じんを舞い上がらせるような強い風を吹かせる低気圧などが通ることが多いこともあって、黄砂が多く観測されます。

黄砂が飛来すると、周りの景色や空が黄色っぽくかすんだり、洗濯物が汚れたりといった影響があります。また、黄砂の量が多いと、見通しがきかなくなって飛行機が欠航するなど、航空機の運航に影響を与えることも稀にあります。

気象庁及び各地の気象台では、交通機関や日常生活に大きな影響を及ぼすような黄砂を観測したり、予想したりしたときには「黄砂に関する気象情報」を発表します。また、気象庁ホームページには、日本とその周辺で黄砂を観測した地点や黄砂の予想図を掲載する「黄砂情報」のページを設けています。この「黄砂情報」のページは05時、11時、17時の1日3回更新していますので、ご利用ください。

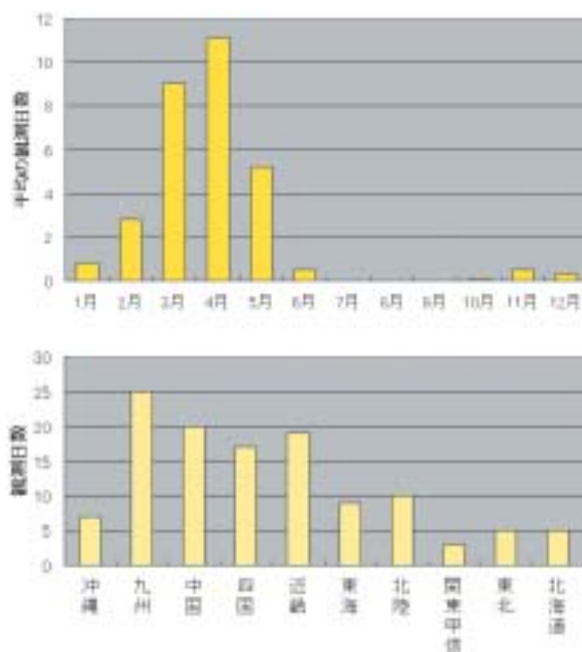


図1 (上): 平成2年から平成16年までの15年間に黄砂を観測した日数を月別に平均したグラフです。3月から5月までに観測が集中していることがわかります。

図2 (下): 平成16年に黄砂を観測した日数を地域別にまとめたグラフです。西日本での観測が多いことがわかります。

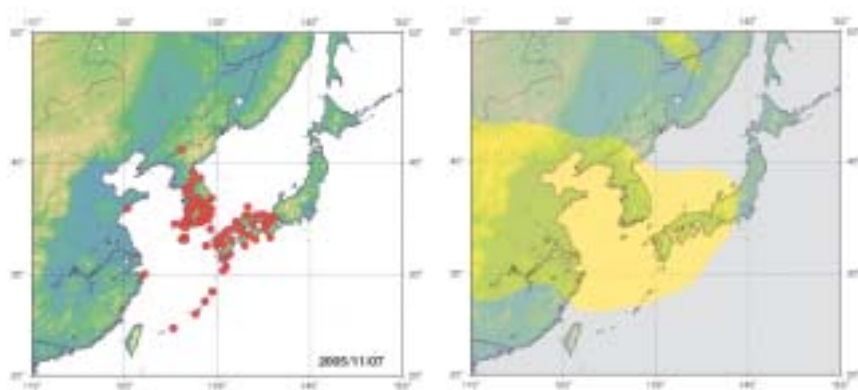


図3: 平成16年11月7日に気象庁ホームページに掲載した黄砂の情報です。左は黄砂を観測した地点を示した図で、右は黄砂の広がり方を予想した図です。